

## ヒスイ原産地における縄文～弥生時代移行期の玉製作に関する研究

荒川 隆史

### 1 研究の目的

ヒスイの原産地は、国内に 12 か所確認されているが、玉の素材を産出するのは新潟県糸魚川地域のみである。糸魚川地域が原産のヒスイは、縄文時代から古墳時代の玉の素材として全国に流通していた。

近年の縄文～弥生時代のヒスイ研究は、玉の製作工程や流通に関するもの（木島勉 2004、大賀 2011 など）、玉の性格に関するもの（栗島 2007 など）、出土状況に関するもの（高橋 2005 など）、原産地の科学分析に関するもの（藁科 1988 など）など多岐にわたる。

一方、ヒスイ原産地である糸魚川地域では、大角地遺跡から世界最古のヒスイ加工品となる縄文時代前期のヒスイ製敲石が出土しているほか（新潟県教育委員会ほか 2006）、縄文時代中期の長者ヶ原遺跡（糸魚川市教育委員会 2016）や縄文時代晩期の寺地遺跡（青海町 1987）からヒスイ製品及び製作工程品が大量に出土している。また、弥生時代では大塚遺跡（新潟県教育委員会 1988）から前期の玉製作関連資料が出土しているものの、中期の資料はほとんど確認できず、後期の後生山遺跡（糸魚川市教育委員会 1986）まで空白期間が存在する。

本研究では、縄文～弥生時代移行期の玉について検討するものである。糸魚川地域における縄文～弥生時代のヒスイ研究状況は、木島勉氏と笹澤正史氏によってまとめられている（木島 2019、笹澤 2019）。しかし、縄文～弥生時代移行期の状況は資料数が少ないこともあり、ほとんど触れられていない。このため、ヒスイ原産地における縄文～弥生時代移行期の実態を確認する必要がある。高橋浩二氏の全国的な集成（高橋 2005）によれば、東日本では縄文時代晩期後葉にヒスイ玉の出土量は減少する。一方、北部九州では弥生時代前期以降に有力者の墓にヒスイ玉が副葬されるなど、ヒスイ玉の利用が活発化する。この時期は東日本の縄文時代晩期後葉に並行するため、東西日本の資料の年代を整理する必要がある。

本研究では、ヒスイ原産地における縄文～弥生時代移行期の実態の解明と、ヒスイ玉の時間・空間的検討を目的とする。

### 2 研究の方法

本研究では、下記の項目について調査研究を行う。

#### (1) ヒスイ原産地における製作実態の検討

- ①糸魚川地域における縄文～弥生時代移行期の土器型式を検討する。
- ②各遺跡のヒスイ資料を観察し、各土器型式におけるヒスイ玉製作の内容を把握する。
- ③弥生時代前期で唯一の製作遺跡である大塚遺跡のヒスイ玉について、製作技法の把握と、同類の玉の分布を調査する。

#### 調査対象遺跡

新潟県糸魚川市寺地遺跡、森下遺跡、瑞穂寺跡、大林遺跡、大塚遺跡  
富山県高岡市下老子笹川遺跡、魚津市早月上野遺跡、氷見市大境洞窟

(2) 縄文～弥生移行期のヒスイ玉の分布と所属時期の調査

- ①遺跡報告書等からヒスイ玉を検索し、その所属時期を把握する。
- ②東日本で弥生時代前期のヒスイ玉を観察し、所属時期を把握する。
- ③西日本の弥生時代前期のヒスイ玉が出土している遺跡の資料を検討し、所属時期を把握する。

調査対象遺跡

山形県最上郡大蔵村上竹野遺跡

青森県下北郡川内町板子塚遺跡、弘前市宇田野 (2) 遺跡、上北郡六ヶ所村大石平遺跡

秋田県山本郡八竜町館の上遺跡

石川県小松市八日市地方遺跡

(3) 縄文～弥生移行期のヒスイ玉の時間・空間的検討

- ①ヒスイ玉の所属時期（土器型式）から東西日本における並行関係を把握する。
- ②ヒスイ原産地の製作状況と、国内の分布状況を照合し、縄文～弥生移行期の様相を検討する。

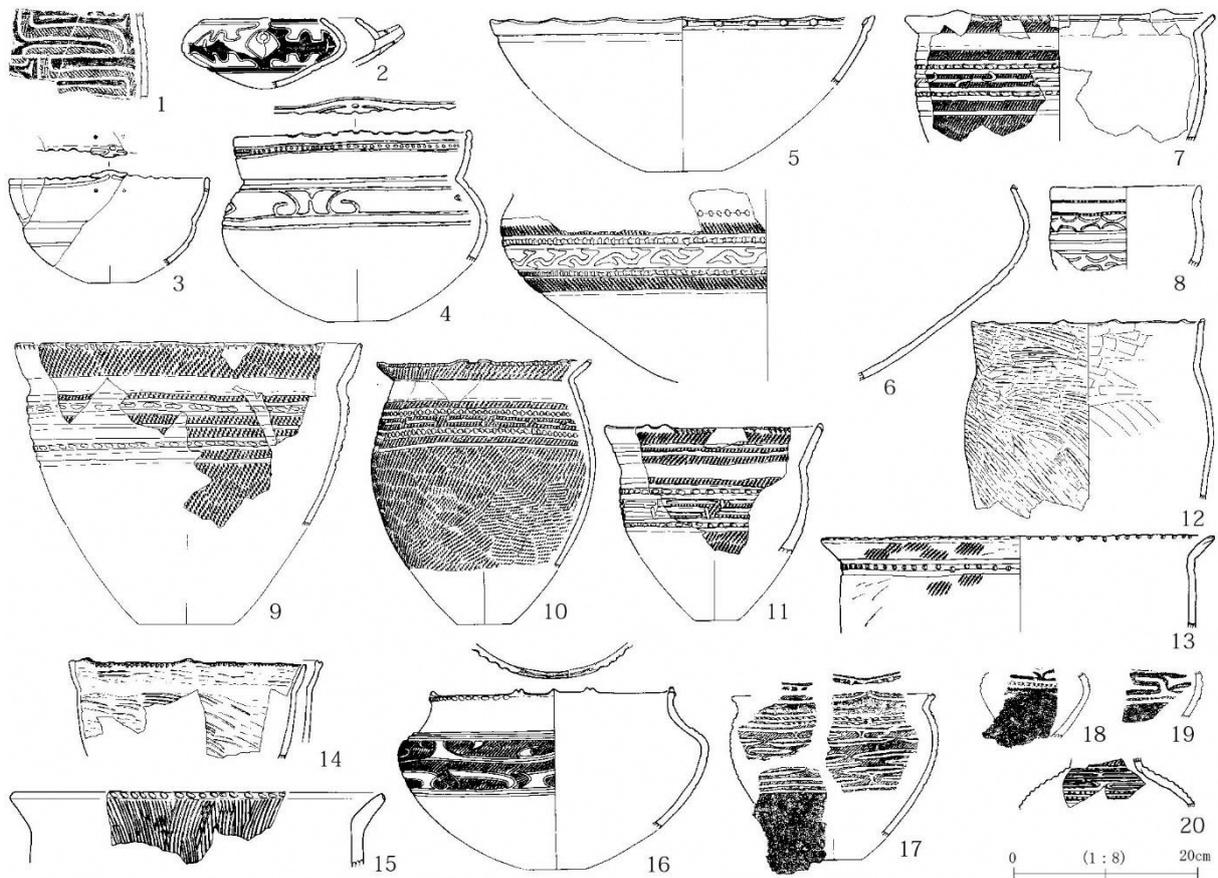
(4) ヒスイ玉の所属時期（土器型式）から東西日本における玉の並行関係を検討

最新の土器型式研究と暦年代研究による縄文～弥生移行期の東西日本の並行関係を基に、ヒスイ玉の時間・空間的検討を行う。

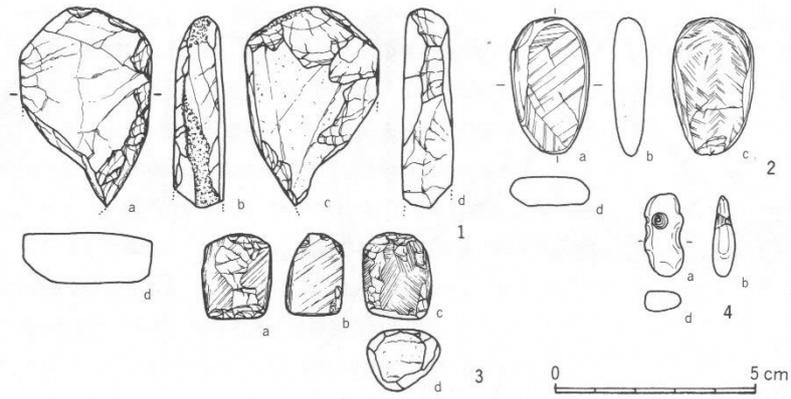
3 糸魚川地域におけるヒスイ玉製作実態の検討

(1) 寺地遺跡

寺地遺跡では、有柱方形配石や炉状配石などからなる配石遺構及び木柱群周辺からヒスイが多量に出土している（青海町 1987）。この地区の土器（第1図）は、晩期前葉の御経塚式（1・2）がある



第1図 寺地遺跡の木柱群・組石墓出土土器（青海町 1987）



第33図 配石遺構出土硬玉 (5)

1 微調整未成品, 2・3 研磨未成品, 4 勾玉

第2図 寺地遺跡の配石遺構出土ヒスイ (青海町1987)



第78図 木柱群・組石遺構出土硬玉 (4)

1~6 形割・微調整未成品, 7~9 丸玉未成品・完成品, 10・11・13・15 研磨未成品, 12 垂玉未成品, 14・17 垂玉, 16 勾玉未成品, 18~20 石製品 (1~14: 硬玉, 15~20: 他の石材)

第3図 寺地遺跡の木柱群・組石墓出土ヒスイほか (青海町1987)

ものの、晩期中葉の中屋式（3～14）、下野式（15）、大洞C2式（16・17）、佐野Ⅱ式（18～20）が主体を占める（石川1988）。出土した木柱について酸素同位体比年輪年代法による分析を行った結果、木柱の表層年輪の暦年代は①紀元前11世紀前半のBC1068、②紀元前10世紀前半のBC978・971、③紀元前10世紀後半～9世紀末のBC920・909・894の大きく3時期に分かれることが明らかになった（荒川・木村・中塚2021）。北陸地方における晩期の土器付着炭化物の14C年代測定によると、中屋式はBC1250～900前後、下野式はBC1000～850前後と推定されており（工藤ほか2008）、寺地遺跡の木柱も中屋式後半から下野式の時期に該当することに矛盾はない。したがって、この地区のヒスイも晩期中葉を中心とするものとしてよかろう。

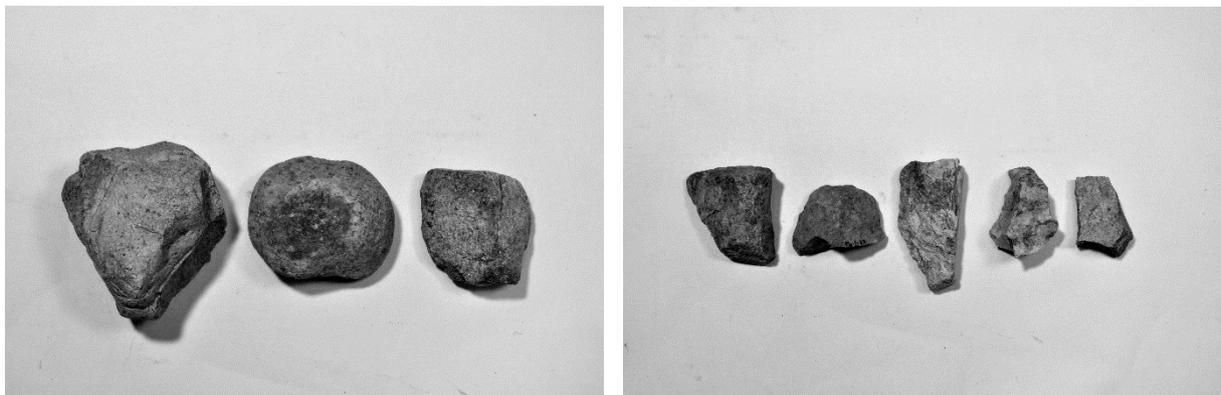
配石遺構からはヒスイ製勾玉や研磨された玉未成品のほか（第2図）、大量の粗割されたヒスイ剥片や砥石が出土している。また、木柱群・配石墓からはヒスイ製の丸玉や垂玉の未成品、粗割されたヒスイ剥片などが出土している（第3図）。以上から、寺地遺跡では晩期中葉の紀元前9世紀末ころまでヒスイ製勾玉・垂玉・丸玉の製作が行われていた可能性が高い。

## （2）森下遺跡

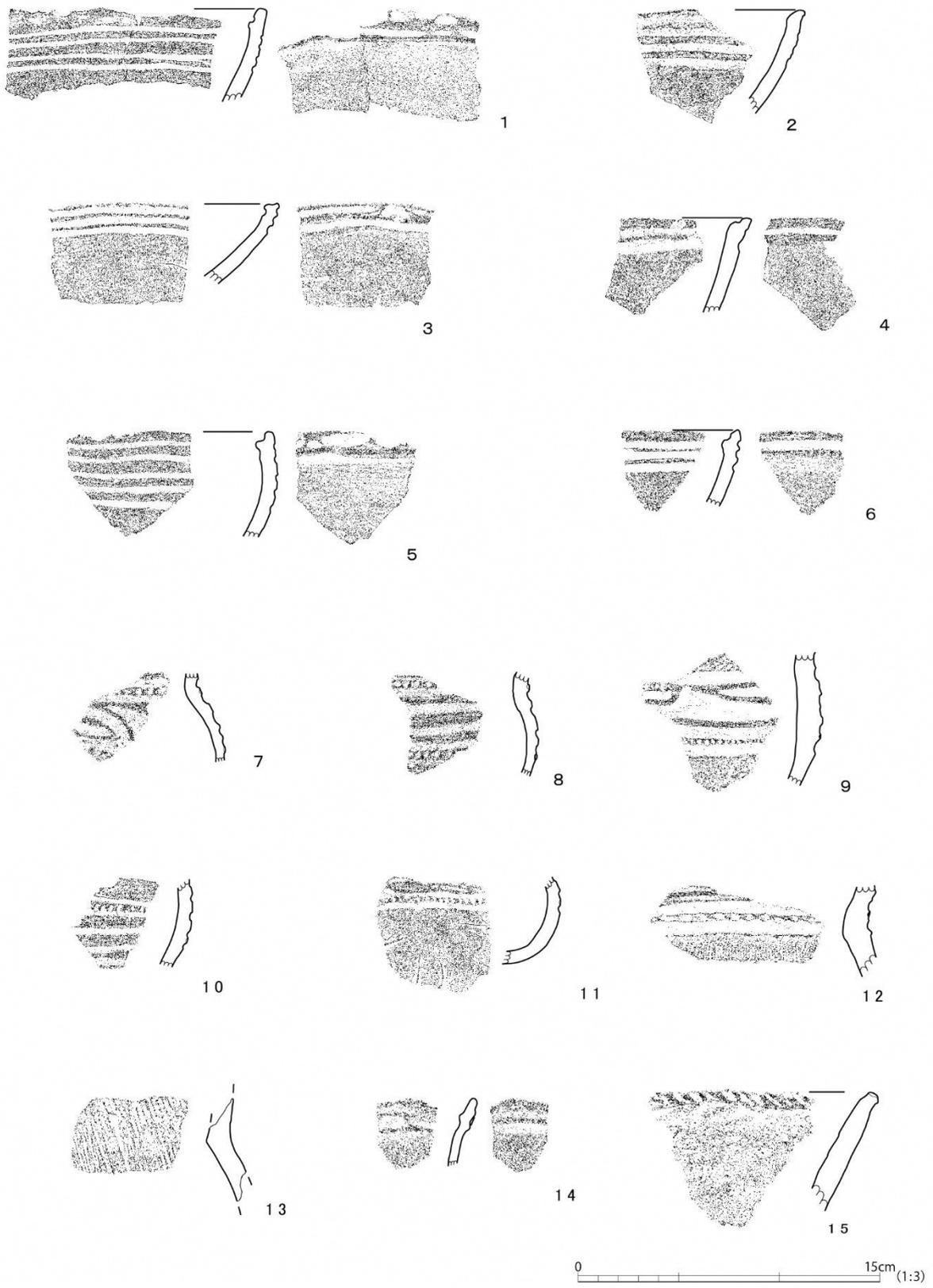
森下遺跡では土坑3基が検出され、晩期の土器・石器や、ヒスイの原石・粗割された剥片・敲石など（第4図）が出土した（糸魚川市教育委員会1997）。

本研究では、土器の拓本図を作成し、時期の検討を行う（第5図）。1は浅鉢で、口縁部に浅い平行沈線文が施され、内面が突帯状に肥厚する。2は浅鉢で、口縁部外面に浅い平行沈線文が4条施され、内面は受け口状に肥厚する。3は浅鉢で、口縁部に隆線手法による平行沈線文が施され、内面に工字文風の沈線文が描かれる。口端は平坦に面取りされる。4は浅鉢で、沈線手法で平行沈線文が施され、平坦に面取りした口端に沈線文が加えられる。5は浅鉢で、口縁部に沈線手法による平行沈線文が施され、内面に平行沈線文と列点状の文様が描かれる。6は浅鉢で、口縁部に隆線手法による平行沈線文が施され、内面は肥厚する。7は鉢で、体部に列点文が加えられた上下の隆線文間に浮線手法で入組文風の文様が描かれる。8大形の鉢で、体部に沈線手法で平行沈線文が施され、上下の隆線上に列点文が加えられる。9は鉢と考えられ、体部に浮線手法で粗大工字文が描かれる。10は浅鉢で、沈線手法による平行沈線文と、隆線上に列点文が施される。11と壺と考えられ、体部に平行沈線文と列点文が施される。12は甕で、頸部に平行沈線文と列点文、肩部に条痕文が施される。13は甕で、頸部から肩部にかけて条痕文が縦位に施される。

9の粗大工字文は浮線手法で描かれることから、佐野Ⅱ式のなかでも新しい段階のものと考えられる。13は下野式後半のものであろうか。一方、隆線手法による平行沈線文が施される浅鉢は、口縁部



第4図 森下遺跡出土ヒスイ



第5図 森下遺跡 (1~13)・瑞穂寺跡 (14)・大林遺跡 (15) 出土土器

内面への施文とともに後出的である。したがって、佐野Ⅱ式から女鳥羽川式にかけての資料と捉えておきたい。

粗割されたヒスイには板状の素材が認められることから（第4図右）、勾玉が作られていた可能性がある。以上から、森下遺跡では寺地遺跡の終末からこれに後続する時期にヒスイ玉製作が行われていたものと推定される。

### （3）水穂寺跡

水穂寺跡では、少量の土器と石器・石製品が出土している（第6図）（糸魚川市教育委員会 2004）。

1は深鉢で、口縁部に幅広平行沈線文、内面は突帯状に肥厚する。5は浅鉢で、工字文が上下2段に描かれるものである。7は体部に細密条痕が施される甕ないし深鉢である。16は浅鉢で、口縁部上端に眼鏡状文を施し、この下に匹字上の浮線文が描かれる。内面にも同様のモチーフが施される。17は深鉢で、口縁部内外面に幅広の平行沈線文が施される。18は深鉢ないし甕で、口縁部の上下に幅広の凹線を施すことにより平行の隆線文を作出している。19は浅鉢で、内傾する口縁部を持ち、肩部に眼鏡状文、体部に工字文が施される。

16は口外帯が発達する以前の浮線文であり、離山式と考えられる。5は大洞A式後半、19は鳥屋1b式～鳥屋2a式に並行するものと考えられる。

出土したヒスイは原石のほか、大小の粗割された剥片があり（第7図）、勾玉など玉が製作されていたと考えられる。

### （4）大林遺跡

縄文～弥生時代移行期の土坑が検出され、土器・石器・石製品が出土している（第8図）（糸魚川市教育委員会 2012）。

80～94はSK11から出土したものである。80は壺で、頸肩境に段を持ち、肩部の平行沈線文は途切れる。82は深鉢で、幅約9mmの3条線の工具で条痕文が体部で縦位に、口縁部で横位に施される。口縁部内面は受け口状となる。85は無文の浅鉢で、内外面が赤彩される。89は甕で、口縁部が外傾し、頸肩部の屈曲が弱い器形である。口縁部に沈線手法による平行沈線文が施され、頸部は無文である。肩部には平行沈線文に縦のスリットを加え工字文風に描かれる。

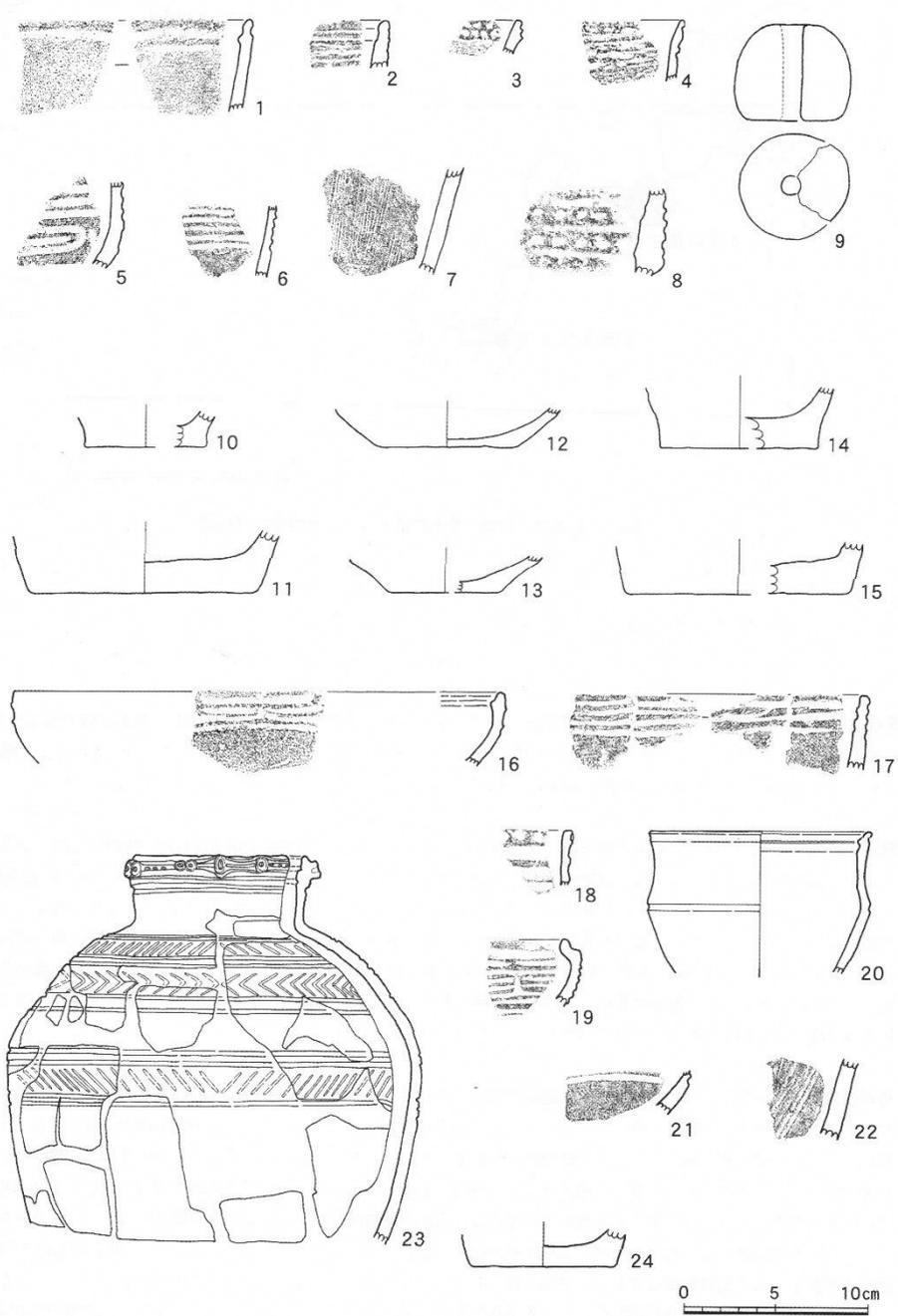
94～104はSK12から出土したものである。97は甕で、口縁部に沈線手法で工字文が描かれる。内面には指頭圧痕が認められる。98は台付浅鉢で、地紋に縄文R、口縁部に沈線手法で平行沈線文が施される。104は壺で、肩部の平行沈線文を縦に区切り工字文風に仕上げている。

89の器形は、上越市和泉A遺跡ブロック8（新潟県教育委員会ほか1999）など氷Ⅱ式期に見られる甕と共通する。98は緒立式期のものと考えられる。したがって、本遺跡は弥生時代前期を主体とするものと考えられる。なお、本遺跡ではヒスイ玉の製作は明確に捉えられない。

### （5）大塚遺跡

弥生時代前期の緒立式・砂沢式・水神平式・遠賀川式土器が共伴する遺跡である（新潟県教育委員会1988）。

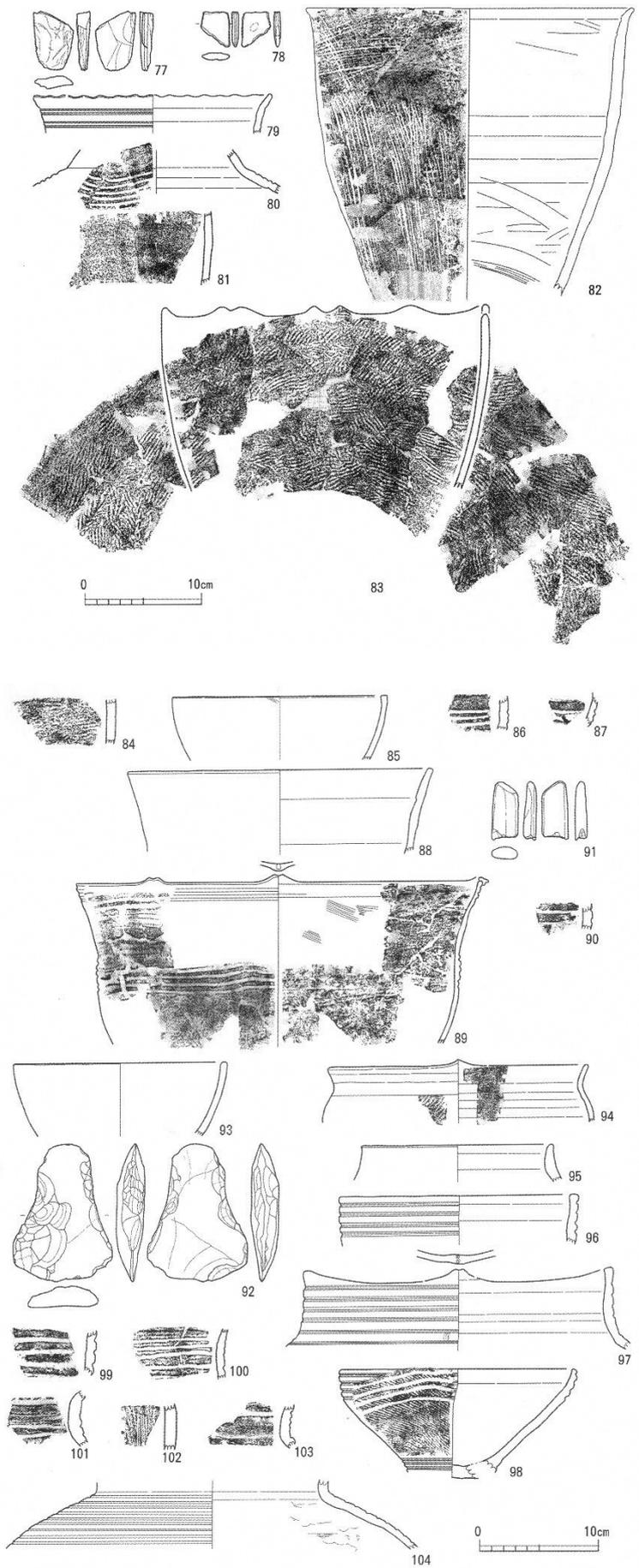
ヒスイは粗割された剥片が多量に出土したほか、玉の未成品を確認できる（第9図）。285～288は三角錐状に分割された素材で、上部端に両側穿孔によって極めて小さな孔があげられている。研磨はほとんど行われておらず、すべて未成品である。同サイズの三角錐状剥片が多数あり、同様の垂玉が



第6図 水穂寺跡出土土器 (糸魚川市教育委員会 2004)



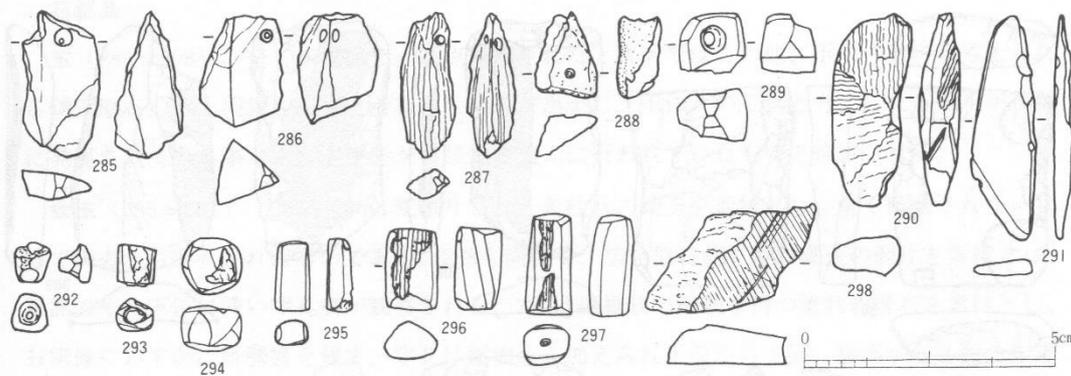
第7図 水穂寺跡出土土器 (糸魚川市教育委員会 2004)



第8図 大林遺跡出土土器 (糸魚川市教育委員会 2012)

製作されていたと考えられる。

縄文時代の勾玉や垂玉は片側穿孔が大半を占めるが、大塚遺跡のような小さい穴を両側から穿孔する事例はほとんど見られない。むしろ、弥生時代中期以降に製作される勾玉の穿孔方法に類似すると言える。こうした技術がどのように出現したかについては今後の課題であるが、縄文～弥生時代移行期の技術的転換点として注目されるとともに、この資料の分布についての検討が必要である。



第9図 大塚遺跡出土ヒスイほか（新潟県教育委員会 1988）

#### (6) 糸魚川地域における縄文～弥生時代移行期のヒスイ玉製作について

糸魚川地域における縄文～弥生時代移行期の遺跡は、佐野Ⅱ式～女鳥羽川式：森下遺跡、離山式：水穂寺跡、緒立式・氷Ⅱ式：大林遺跡・大塚遺跡におおむね位置づけられる。晩期末葉の氷Ⅰ式を主体とする遺跡は確認できなかったが、いずれの遺跡でも小規模ながらヒスイ玉製作が確認されており、縄文～弥生時代移行期のヒスイ玉製作が継続していたと考えられる。ただし、寺地遺跡のような大量生産は行われておらず、晩期中葉を境として晩期後葉にヒスイ玉生産が縮小した可能性が高いと考えられる。

### 4 縄文～弥生移行期のヒスイ玉の分布と所属時期の調査

#### (1) 新潟県新発田市青田遺跡（第10図）

新発田市青田遺跡は鳥屋2a式～鳥屋2b式・大洞A'式の集落である（新潟県教育委員会ほか2004）。ヒスイ垂玉554は円柱状で緒締形に分類でき、穿孔は片側からである。所属時期は鳥屋2a式～鳥屋2b式・大洞A'式に限定でき、出土位置・層位から鳥屋2b式・大洞A'式に位置付けられる可能性が高い。青田遺跡で出土したヒスイはこの1点のみである。

このほか、平玉540は結晶片岩様緑色岩（クロム白雲母）に同定されたものである（藁科2004）。産地は九州の可能性が高いが、九州における結晶片岩様緑色岩の玉生産は晩期前葉に終焉しており（大坪2019）、所属年代に大きな開きがある。一方、管玉549・550は細形のもので、晩期末葉の東日本における出土数はごくわずかである。管玉549は緑色凝灰岩製で、佐賀県牟田辺遺跡のものと同じ産地と同定された。また、管玉550は碧玉製で、原産地は同定されていないものの、ESR分析では菜畑遺跡のものと同じ結果が得られた。これらはすべてヒスイと同時期の鳥屋2b式・大洞A'式期のものである。

以上から、青田遺跡では晩期最終末に結晶片岩様緑色岩玉も含め、九州産の玉の流通を受け入れる環境下にあったものと推定される。このことは、ヒスイ玉の西日本への流通を考えるうえで重要であろう。

## (2) 新潟県阿賀野市山口遺跡 (第 11 図)

山口遺跡は弥生時代前期末葉～中期初頭の遺跡である(新潟県教育委員会ほか 2010)。ヒスイ垂玉 279 は三角錐状のものである。質の良い転石を利用したもので、頂部下の薄い縁辺付近に両側穿孔で小さな孔をあけている。形状および穿孔方法は大塚遺跡例と共通し、時期的にも符合することから、大塚遺跡を含む糸魚川地域で製作されたものと推定される。283 はヒスイ原石だが、側面の一部に穿孔したような痕跡を確認できる。このほか、蛇紋岩製の獣形勾玉 280, 垂玉 281・282, 原石 284・285 がある。

## (3) 山形県最上郡大蔵村上竹野遺跡 (第 12 図)

上竹野遺跡は縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前葉の集落及び再葬墓群を中心とする遺跡である((公財)山形県埋蔵文化財センター2019)。ヒスイ管玉 4 は、壺棺が納められた再葬墓 SK523 の底面から出土したものである。太形で、両側から穿孔されている。壺内面に付着する炭化物の放射性炭素年代測定による 2 $\sigma$  暦年代範囲は、322 - 206BC である。ヒスイ垂玉 5 は、再葬墓 SK525 に納められた合口土器棺の深鉢内から出土したものである。三角錐状を呈し、質の良い転石を利用したものである。頂部下の薄い縁辺付近に片側穿孔で小さな孔をあけている。両側穿孔ではないものの、形状や小さな孔をあける特徴は大塚遺跡例と共通する。深鉢に付着する炭化物の放射性炭素年代測定による 2 $\sigma$  暦年代範囲は、319 - 207BC である。

以上 2 点の放射性炭素年代は弥生時代前期末～中期前葉に当たり、土器棺は弥生時代前期の可能性がある。したがって、大塚遺跡と時期的に符合し、糸魚川地域で製作されたものと推定される。

## (4) 秋田県山本郡八竜町館の上遺跡 (第 13 図)

館の上遺跡は、弥生時代前期～中期前葉の墓を中心とした遺跡である(秋田県教育委員会 2000)。垂玉 S44 は、土器埋設遺構 SR311 に納められた大型壺から出土したものである。報告書で材質はメノウとされているが、実見したところヒスイの可能性が高いことが分かった。質の良い転石を利用したもので、三角錐状の頂部下の薄い縁辺付近に両側穿孔で小さな孔をあけている。形状および穿孔方法は、大塚遺跡例と共通する。類遠賀川系土器の大型壺は、口縁部内面に沈線が施されるなどの特徴から砂沢式直後の弥生Ⅱ期に位置付けられるようである(根岸 2020)。大塚遺跡に時期的に近く、大塚遺跡を含む糸魚川地域で製作されたものと推定される。

## (5) 青森県下北郡川内町板子塚遺跡 (第 14 図)

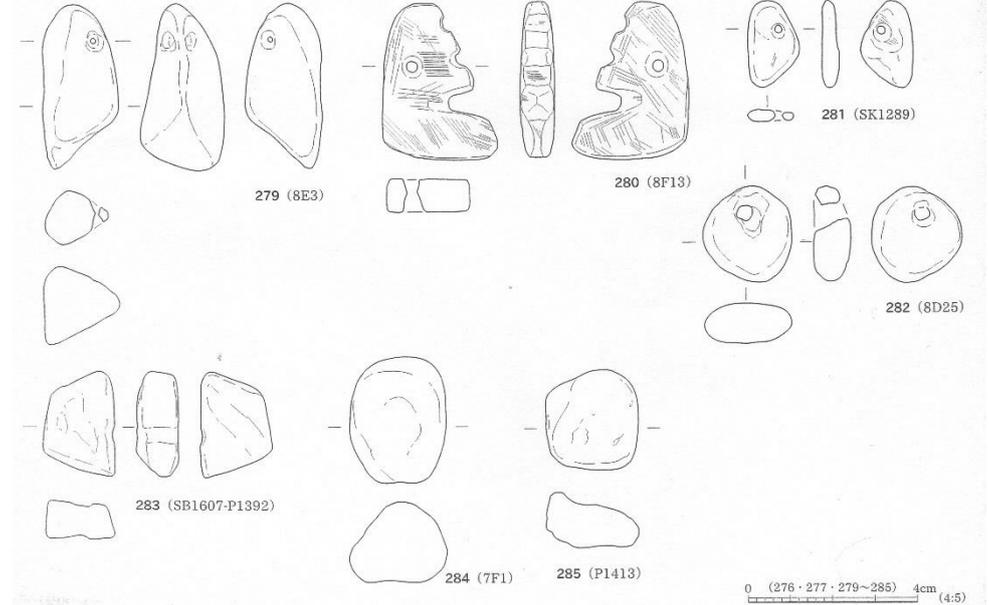
板子塚遺跡では弥生時代前期～中期の土坑墓が検出されている(青森県教育委員会 1995)。ヒスイ勾玉 1 は、第 8 号土坑墓から出土したものである。形状は縄文勾玉で、薄い転石が利用され、片側から穿孔されている。変形工字文土器の破片が出土しており、弥生時代前期の可能性がある。

## (6) 石川県小松市八日市地方遺跡 (第 15 図)

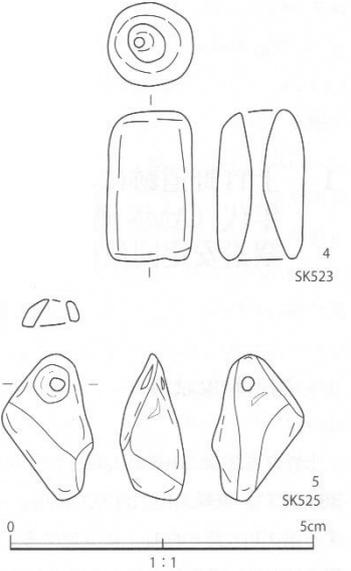
八日市地方遺跡は縄文時代晩期末葉～弥生時代中期を中心とする集落である。縄文～弥生移行期の遺物は埋積された浅谷から出土している(小松市教育委員会 2003・2014)。2 点のヒスイ垂玉は、いずれも八日市地方編年のⅠ期(弥生時代前期)に位置付けられる可能性が高い資料である。88 は質の良い転石を利用したもので、三角錐状の頂部下の薄い縁辺付近に両側穿孔で小さな孔をあけている。形状および穿孔方法は、大塚遺跡例と共通する。328 は小型ではあるが、形状は三角錐状を呈す。頂部



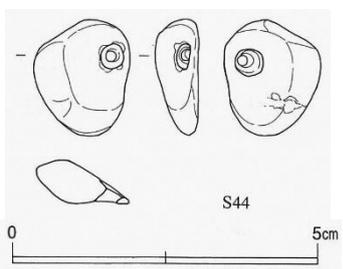
第 10 図 青田遺跡出土玉 (新潟県教育委員会ほか 2004)



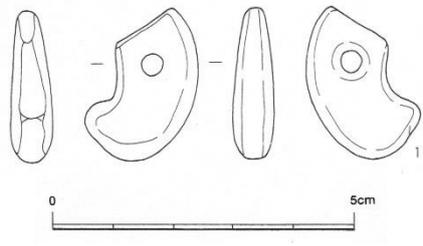
第 11 図 山口遺跡出土ヒスイほか (新潟県教育委員会ほか 2010)



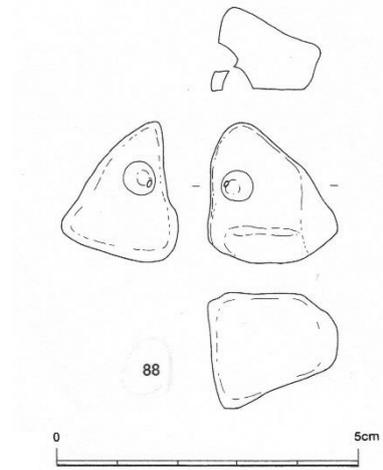
第 12 図 上竹野遺跡出土ヒスイ (山形県埋蔵文化財センター 2019)



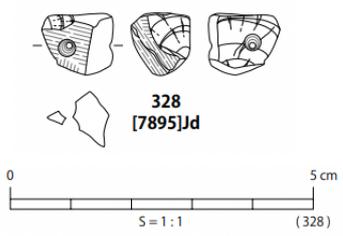
第 13 図 館の上遺跡出土ヒスイ (秋田県教育委員会 2000)



第 14 図 板子塚遺跡出土ヒスイ (青森県埋蔵文化財調査センター 1995)



第 15 図 八日市地方遺跡出土ヒスイ (小松市教育委員会 2003・2014)



下の縁辺部に両側穿孔で小さな孔があげられている。孔のある片面は光沢を持ち、もう一面は粗割された状態を保つ。大塚遺跡例が研磨前の段階のものとするれば、328 は研磨段階に進んだ資料と理解することも可能である。

両資料は大塚遺跡と時期的に符合することから、糸魚川地域で製作された三角錐状垂玉が糸魚川以西に流通していたことを示す点で重要である。

## 5 縄文～弥生移行期のヒスイ玉の時間・空間的検討

### (1) 北部九州とヒスイ原産地との時間的關係

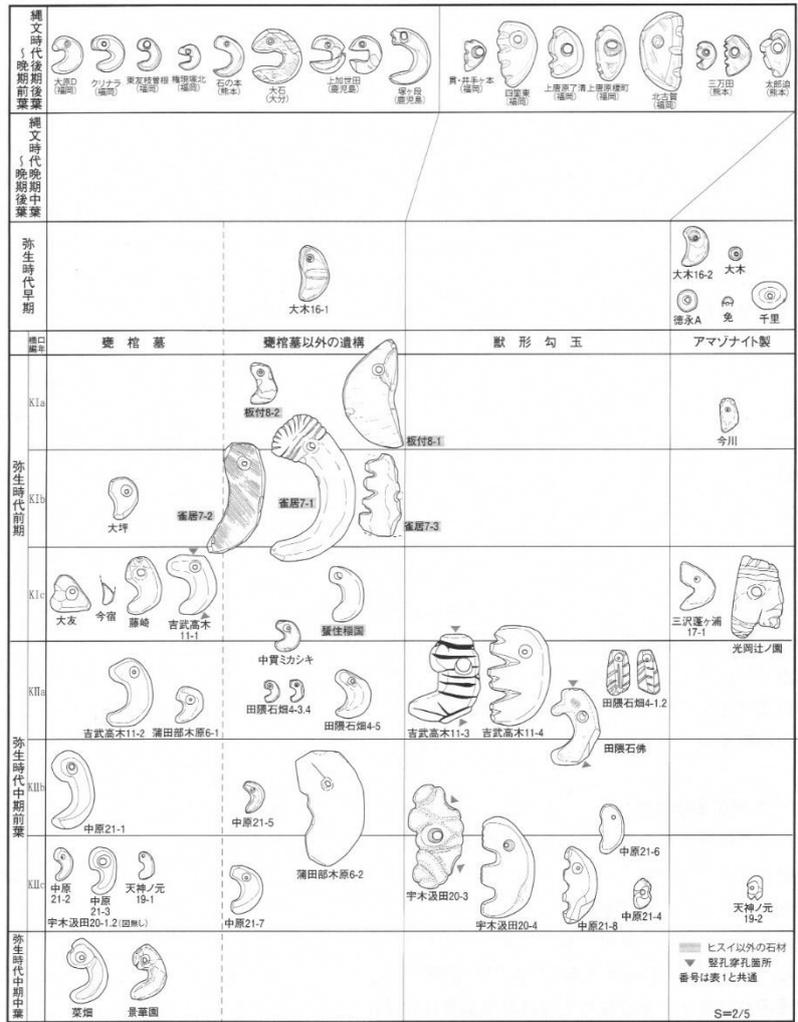
木下尚子は八日市地方遺跡例と大塚遺跡例の共通点を指摘し、佐賀県唐津市大友遺跡にも類似資料が存在することなどから、弥生時代前期にヒスイ製品の素材が北陸を介して北部九州に流通した可能性を示した（木下 2021）。一方、大坪志子は九州における縄文勾玉が晩期前葉で終焉を迎え、弥生時代早期まで空白ができることと（第 16 図）、弥生時代早期とされる菜畑遺跡のヒスイ勾玉が弥生時代中期中葉以降に所属すると判断したうえで、縄文勾玉と弥生勾玉に関連性はないと結論付ける（大坪 2019）。

小林圭一・中沢道彦による縄文～弥生時代移行期の広域土器編年では、弥生時代早期の山ノ寺式／夜臼 I 式は東北地方の大洞 C 2 式新段階に並行する（第 17 図）（小林 2018）。糸魚川地域では佐野 II 式新段階に当たり、寺地遺跡や森下遺跡などでヒスイ玉生産が活発に行われていた時期である。つまり、第 16 図の大木遺跡のヒスイ勾玉は東日本の晩期中葉に糸魚川地域からもたらされた可能性が高いこととなる。また、田畑直彦による遠賀川式土器の広域編年（田畑 2018）によると、第 16 図樋口編年 K I a 期は板付 II a 式に並行し、小林・中沢編年に照らし合わせると東北地方の大洞 A 式に並行することになる。同様に、K I b 期－板付 II b 式・II c 式－大洞 A 式～青木畑式・砂沢式（前期）、K I c 期－板付 II c 式～城ノ腰式－青木畑式・砂沢式～原式（中期前葉）となる。第 16 図 K I c 期の大友遺跡ヒスイ垂玉は大塚遺跡と同時期となり、木下による編年観に矛盾はない。なお、田畑編年によると K II a 期は東北地方の中期前葉～中葉に並行することとなり、第 16 図の年代観とずれが生じる。

### (2) 縄文～弥生時代移行期のヒスイ玉の動態

ヒスイ原産地の糸魚川地域では、縄文時代晩期終末の大洞 A 式～大洞 A 式期にヒスイ玉生産が下火になりながらも継続して行われていた。鳥屋 2b 式・大洞 A 式の新潟県青田遺跡では西日本系の土器は認められないものの、少量のヒスイ垂玉と九州産の可能性が高い平玉・管玉が併存しており、北陸ルートによる九州との交流を見出すことができる。結晶片岩様色岩（クロム白雲母）の平玉の存在は、九州で未確認の玉作遺跡が存在することを想起させる。しかし、北部九州ではヒスイ玉が少なく、ヒスイ原産地との直接的な関係は希薄であったと推測される。

弥生時代前期になると、糸魚川市大塚遺跡には東北地方から砂沢式土器、西日本から遠賀川式土器、東海地方から水神平式土器が搬入される。これと歩を合わせるように、大塚遺跡独特の三角錐状垂玉が新潟県の阿賀野川を越えた山口遺跡、山形県上竹野遺跡、北東北の秋田県館の上遺跡にまで流通した。東北地方では墓の副葬品として珍重された様子がうかがえる。一方、石川県八日市地方遺跡や佐賀県大友遺跡など西日本から北部九州にも流通した。この時期から北部九州でヒスイ勾玉が増加することから、ヒスイ原産地と北部九州との間で密接な関係が構築された可能性がある。



第 16 図 九州北部における縄文時代後期後葉～弥生時代中期前葉の勾玉変遷 (大坪 2019)

推定年代 ±C BP	九州	山陰	瀬戸内 (四国含む)	近畿	東海西部 (愛知・遠江)	東海西部 (駿河)	北陸	中部高地	関東	新潟 (上越)	新潟 (中下越)	東北	北海道 (渡島半島)
3500 ± 3400	三万田式	「原田遺跡2区」	福田KⅢ式	元住古山Ⅱ～ 宮滝Ⅰ式	長谷式	蛭田式	井口Ⅰ式	高井東式	高井東式・ 曾谷式	龍峰 後期Ⅳ期	元屋敷7期	庵付土器Ⅰ段階	堂林式(古中)
3400 ± 3200	鳥井原式 / 御領式	(+)	福田KⅢ式～ 岩田第三類	宮滝2式	馬見塚KⅠ式・ 吉胡KⅠ式	蛭田式 / 清水天石山下層Ⅰ	井口Ⅱ式	高井東式・ (石神J34号住居)	高井東式・ 安行Ⅰ式	龍峰 後期Ⅴ期	元屋敷8期	庵付土器Ⅱ段階	堂林式(新)
	広田式・天城式・ 上加田式	(+)	(+)	滋賀里Ⅰ式	寺津下層式・ 伊川津Ⅰ式	清水天石山下層Ⅱ	八日市新保Ⅰ式	「中ノ沢式」・ (後平2号住居)	安行2式(古)	龍峰 後期Ⅵ期	元屋敷9期	庵付土器Ⅲ段階	湯の里3式
3200 ± 3100	古閑式(古)・ 入佐式(古)	「原田遺跡2区」	岩田第四類	滋賀里Ⅰ～Ⅱ式	(+)	清水天石山下層Ⅱ	八日市新保Ⅱ式	「中ノ沢式」・ (大花2号住居)・ 清水天石山下層Ⅱ	安行2式(新)	龍峰 後期Ⅶ期	元屋敷10期	庵付土器Ⅳ段階	御殿山式
3100 ± 3000	古閑式(新)・ 入佐式(新)	「板屋Ⅲ遺跡 旧河道」	(+)	滋賀里Ⅱ式	下別所式・ 伊川津Ⅱ式	清水天石中層Ⅰ	御経塚式(古)・ 勝木原式	(大花1号住居)・ 清水天石中層Ⅰ	安行3a式(古)	(正面ヶ原A遺跡 2号住居)	大洞BⅠ式	大洞BⅠ式	東山Ⅰa式
3000 ± 2900	黒川式(古中)	「原田遺跡1区 Ⅱ群2類」	舟津原式	滋賀里Ⅲa式	寺津式・ 吉胡BⅠ式	清水天石中層Ⅱ	御経塚式(中)・ 勝木原式	清水天石中層Ⅱ	安行3a式(新)	(正面ヶ原A遺跡 15-1号土坑)	大洞BⅡ式	大洞BⅡ式	東山Ⅰb式
2900 ± 2800	黒川式(新)	「神原Ⅱ遺跡」	谷尻式	龍原式(新)	板井式・ 稲荷山式	清水天石山上層	中屋式(新)	佐野Ⅰa式・ 清水天石中層Ⅱ	天神原式(古)・ 安行3b式・ 姥山Ⅱ式	佐野Ⅰa式	大洞BC式	大洞BC式	上ノ国式(古)
2800 ± 2700	「江辻SX1」・ 千河原段階	「桂見Ⅰ式」	前池式	滋賀里Ⅳ式	西之山式	(+)	下野式(古)	佐野Ⅱ式(古中)	安行3d式・ 前浦2式	佐野Ⅱ式(古中)	朝日式	大洞C2式(古)	(+)
2700 ± 2600	山ノ寺式 / 夜白Ⅰ式	「桂見Ⅱ式」	津島岡大式	口酒井式	五貫森式(古)	(龍鹿塚遺跡)	下野式(新)	佐野Ⅱ式(新)	佐野Ⅱ式(新)	佐野Ⅱ式(新)	上野原式	大洞C2式(新)	聖山Ⅰ群
2700 ± 2600	夜白Ⅱa式	古市河原式	沢田式	船橋式	五貫森式(新)	「間屋塚式」	長竹式(古)	女島羽川式	柱台式・ 向台式	女島羽川式	鳥屋Ⅰ式	大洞A式(古)	聖山Ⅱ群
2600 ± 2500	板付Ⅰ式 / 夜白Ⅱb式	古海式	沢田式 / 津島式	長原式 / 第1様式(古)	馬見塚式	(駿河山王遺跡)	長竹式(新)	龍山式・ 氷Ⅰ式(古)	杉田Ⅲ式・ 千綱式	龍山式・ 氷Ⅰ式(古)	鳥屋2a式	大洞A式(新)	湯の里Ⅴc類
2500 ± 2400	板付Ⅱa・b式	「前期2式」	高尾式	第1様式(中)	檉王式		柴山出村式(古)	氷Ⅰ式(中新)	杉田Ⅲ式・千綱式 / 籠海式	氷Ⅰ式(中新)	鳥屋2b式	大洞A'式	尾白内Ⅰ群
2400 ± 2300	板付Ⅱc式	「前期3式」	門田式	第1様式(新)	水神平式	(駿河山王遺跡)	柴山出村式(新)	氷Ⅱ式	(境水)・ 荒海式・ 神Ⅱ式	氷Ⅱ式	緒立式	青木畑式・ 砂沢式	尾白内Ⅱ群

(小林圭一・中沢道彦 2017年5月作成)

第 17 図 縄文時代後期後葉～弥生時代前期土器編年表 (小林 2018)

## 6 今後の課題

北部九州における縄文勾玉と弥生勾玉の関係については様々な見解がある。しかし、唯一明確なことは弥生勾玉のヒスイ原産地は糸魚川地域だという点である。弥生時代中期に活発化するヒスイ勾玉生産のために、誰がどのように糸魚川地域の人々にヒスイ素材の供給を依頼したのか。また、糸魚川地域の人々はどのようにしてヒスイ素材を流通させたのか。こうしたヒスイ原産地からの視点による研究によって縄文～弥生時代のヒスイ玉研究は新たな段階に進むことができると考えている。そして、縄文～弥生時代移行期における研究は、縄文時代におけるヒスイ玉生産の終焉と、弥生時代の新たなヒスイ玉生産の萌芽という重要な局面に位置しており、当該期の全国的な資料調査が必要である。このためには、精緻な土器型式編年に基づくヒスイ玉の編年的位置づけが鍵となる。

## 謝辞

本研究の実施に当たり、次の機関・個人から多大な御指導、御協力をいただきました。末筆ではありますが、記してお礼申し上げます。

青森県埋蔵文化財調査センター 秋田県立博物館 糸魚川市教育委員会  
小松市埋蔵文化財センター 富山県埋蔵文化財センター (公財) 山形県埋蔵文化財センター  
岡本淳一郎 岡本 洋 加藤 学 加藤 竜 木島 勉 木村 高 小池悠介 小林圭一  
下濱貴子 菅原哲文 中沢道彦 永嶋 豊 長谷川大旗 松井広信 山岸洋一

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1995 『板子塚遺跡発掘調査報告書』  
秋田県教育委員会 2000 『館の上遺跡』  
荒川隆史・木村勝彦・中塚武 2021 「酸素同位体比年輪年代法による縄文時代晩期～弥生時代中期の暦年代」『新潟考古』第32号、新潟県考古学会  
石川日出志 1987 「縄文時代晩期の土器」『史跡 寺地遺跡』青海町  
糸魚川市教育委員会 1986 『後生山遺跡』  
糸魚川市教育委員会 1997 『糸魚川市内遺跡発掘調査概報』  
糸魚川市教育委員会 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』  
糸魚川市教育委員会 2012 『大林遺跡発掘調査報告書』  
糸魚川市教育委員会 2016 『史跡長者ヶ原遺跡発掘調査報告書』  
青海町 1987 『史跡 寺地遺跡』  
大賀克彦 2011 「弥生時代における玉類の生産と流通」『講座日本の考古学5』  
大坪志子 2019 「九州における弥生勾玉の系譜」『考古学研究』第66巻第1号  
木島 勉 2004 「北陸地方の玉文化ーヒスイ製玉類の攻玉」『季刊考古学』第89号  
木島 勉 2019 「ヒスイの生産と流通」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会  
木下尚子 2021 「弥生管玉・勾玉と北陸 九州からの視点」『北陸と世界の考古学 日本考古学協会2021年度金沢大会資料集』  
工藤 雄一郎・小林 謙一・山本 直人・吉田 淳・中村 俊夫 2008 「石川県御経塚遺跡から出土した縄文時代後・晩期土器の年代学的研究」『第四期研究』47巻6号、日本第四紀学会  
(公財) 山形県埋蔵文化財センター 2019 『上竹野遺跡』  
栗島義明 2007 「硬玉製大珠の社会的意義」『縄文時代の社会考古学』  
小林圭一 2018 「亀ヶ岡式土器とその年代観」『季刊考古学』別冊25「亀ヶ岡文化」論の再構築、雄山閣

- 小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡 I』
- 小松市教育委員会 2014『八日市地方遺跡 II』第3部製玉編／第4部木器編
- 笹澤正史 2019「玉の生産と流通」『新潟県の考古学III』新潟県考古学会
- 高橋浩二 2005『ヒスイ製品の流通と交易形態に関する経済考古学的研究』
- 田畑直彦 2018「遠賀川式土器の特質と広域編年・暦年代」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』雄山閣
- 新潟県教育委員会 1988『原山遺跡 大塚遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999 和泉 A 遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004『青田遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006『大角地遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2010『山口遺跡』
- 根岸 洋 2020『東北地方北部における縄文／弥生移行期論』雄山閣
- 藁科哲男 1988「ヒスイの原産地を探る」『古代翡翠文化の謎』
- 藁科哲男 2004「青田遺跡出土玉類の非破壊分析による組成分析と原産地分析」『青田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団